

# PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年7月 No.93

胎児を守る運動

7月13日

## 日本生命尊重の日

### 胎児の人権宣言

#### 前文

人間はひとりひとりが、受精の瞬間から自然死にいたるまで、生来の尊厳と固有の価値を有するので、今日我々は公けに以下の六ヶ条の宣言に同意する。

#### 第一条

我々は、胎児ひとりひとりが、受精以後の発育のすべての段階において、人間であるという科学的事実を確認する。

#### 第二条

我々は、本宣言に定められている権利を、人種、胎児年齢、性別、国籍、宗教、社会・経済的出自（生まれ）、障害の有無、その他のいかなる理由によっても差別することなく、尊重する。

#### 第三条

我々は、胎児が、1948年の国連の人権宣言に述べられている胎児以外のすべての人間の基本的権利と同様の権利を有することを確認する。我々は、この権利が立法によって認められることを要求する。

#### 第四条

我々は、胎児ひとりひとりが良好な胎内環境で発育する権利を有することを認める。この環境には出産までの母親の適切な保護と両親への支援を求める権利が含まれなければならない。

#### 第五条

胎児が、受精の時から、科学的、医学的、または医学外的実験や利用に供されない権利を有することを確認する。ただし、この実験や利用が胎児に直接役立つ場合を除く。

#### 第六条

我々は、胎児の発育とそれに関する諸問題についての科学的事実の教育の推進に努める。また我々は、女性が子供を産み育てるのを難かしくしている社会的、経済的ならびに法律的諸条件の改善に努める。

#### 結び

以上にかんがみ、我々はすべての国際団体、政府、組織、ならびにすべての善意の人々が、ここに含まれる各箇条を公認し、実行するように強く奨める。

# 「生きた聖書」計画を通して中絶後の心の傷を癒す

「慰めよ、私の民を慰めよ」と、神は仰せられる。「エルサレムの心に語りかけ、公に告げよ、その苦しみは終わり、罪は償われたと。彼は罪のために、主の御手から二重の罰を受けた」。

イザヤの書 四十：1-2

中絶後の心の傷を癒すための計画の多くは聖書研究を拠り所にしていきます。自分を無価値だ

と思う気持ちや和らぐまで、聖書を理解することが困難な女性もいます。また聖書研究の方法によって、ただ自分の価値の無さや罪深さの思いが深まるだけの女性もいます。何年にもわたって、私達は、私達が「生きた聖書」と呼ぶ計画を女性達の救いを求める精神的・心理的な旅に組み入れることによって、非常に効果的に女性達の手助けとなってきました。それによって女性達は、積極的に聖書の話の中に入り、自分を神様と話をしている聖書の中の女性と同一視することによって、神様の愛ばかりでなく神様が与える課題をも理解することができるのです。「生きた聖書」という考え方はこの文章の中では、中絶によっ

て傷ついた女性達を慰めるために用いられています。それは傷ついた女性達が神様の優しさや寛容さを経験できるように計画されています。それは神様の優しさがこだまして聖書の言葉に耳を傾けるいい機会となります。参加者は儀式や祈りや聖書と積極的に関わるように奨励されます。それは受動的でなく、積極的でダイナミックなものなのです。

その行動と瞑想には、一人一人に対する変わることの無い神様の愛を経験できるように工夫された仮想体験が含まれていきます。聖書講読は彼女達が直面している状況と関連がある話題を取り上げていきます。様々な儀式は、その過程に積極的に入っていくための手段なのです。体の、心の、精神の、感情の働きが合体して、効果的で具体的な対話のための力となるのです。祈りと瞑想は参加者が聖書を吸収する、つまりそれを心で感じて、魂で信じる手助けとなるのです。

「生きた聖書」は、聖書の中で盲人を診られ、イエスが「私に何を望んでいるのか。」と聞かれたことから始まります。路傍に座っている盲人にとっては、イエスの問いかけに対する答えははっきりしていると私達は思うでしょう。

「はっきりしているでしょう。私は目が見えないのです。私は何を望んでいるとお思いなですか。」しかし、「私に何を望んでいるのか。」というイエスの問いに癒されたいのですか。目が見えるということはどういうことなのか知っていますか。もしあなたの目が見えるようになれば、あなたの周りの全てのものが変わるでしょう。あなた自身の自分に対する見方と、他人があなたを見る見方は同じでなくなるでしょう。あなたはその危険を冒す覚悟ができていますか。もちろん、ひとたび目が見えるようになれば、あなたは主の姿が見えるでしょう。それが本当にあなたが望んでいることなのですか。」とキリストが尋ねているかのようにもつと深くその男の願いにまで及んでいるのです。

私達は、中絶の精神的、感情的苦痛を癒してもらいたいと望んでいる女性達にこれと同じ質問をします。あなたは本当に目が見えることを望んでいるのですか。あなたはキリストを見る覚悟がきているのですか。本当に今、治してほしいと思っているのですか。あなたは一体何をキリストにしてほしいと思っているのですか。

参加者はこの世に存在しているイエスの前でその質問に対する答えをはっきりと表現しなければなりません。「生きた聖書」の他の儀式や象徴を用いることを通して、イエスが現実に身近な所に存在していることが具体的なものとなるのです。女性達は、祈り、告白をすることによって、聖書の中で癒されるために打ちひしがれた女性を意図的に探し求められた慈愛あふれる神様の前で、真実を発見することになるのです。

中絶の悲しみや罪悪感を和らげ解決するために、女性達は一種の苦しみを経験しなければなりません。嘆き悲しむことは死に対する自然な反応ですが、その苦痛から立ち直ることを想像できない人は多くいます。中絶をしたという思いを持ち、悲しみを抑えて仕事に復帰することは本当に心が痛み苦しむことです。悲しみのあまり記憶が変になることがあります。全く記憶から消えてしまうこともあります。耐えられない思いのする記憶や罪の意識もあります。女性は、合理化したり、否定したりするこ

とでその苦しみから逃れようとするかも知れません。暗やみの中をさがき苦しんでいる間に、女性は悲しみのほけ口を造り出すことによって、悲しみを回避するかも知れません。中絶をした女性はしばしばうつ状態や摂食異常や薬物乱用や乱交や仕事中毒や自虐行動や性的機能障害や対人恐怖症や心身症や不安や精神錯乱等にはしばしば苦しみます。中絶の悲しみや恥辱と取り組むよりも、苦しい思いをこのようにはけ口に無意識に流し込んでいる女性が多いのです。

礼拝集会の中の各儀式は「生きた聖書」の発想と効果的に組み合わさっています。心理的、精神的な儀式は、参加者が今言葉と行動の面で積極的に参加することを要求しています。私はその過程を天地創造にたとえるのが好きです。神様はただ世界を造られたのではありませんでした。神様の言葉の中に世界を造り出す力があつたのでした。

創世記のなかでは、神様がまず言葉でおっしゃらないことは何も起こりませんでした。神様はこの方法を続けられ、天地創造の全ての段階を言葉で述べられました。神様は何が起ころるか、そして何が成就されたかを確認し宣言されました。話す言葉の中には途方もない力が含まれて

「生きた聖書」という考え方はこの文章の中では、中絶によっ

座っている盲人にとっては、イ

見えることを望んでいるのです

とでその苦しみから逃れようとするかも知れません。暗やみの中をさがき苦しんでいる間に、女性は悲しみのほけ口を造り出すことによって、悲しみを回避するかも知れません。中絶をした女性はしばしばうつ状態や摂食異常や薬物乱用や乱交や仕事中毒や自虐行動や性的機能障害や対人恐怖症や心身症や不安や精神錯乱等にはしばしば苦しみます。中絶の悲しみや恥辱と取り組むよりも、苦しい思いをこのようにはけ口に無意識に流し込んでいる女性が多いのです。

礼拝集会の中の各儀式は「生きた聖書」の発想と効果的に組み合わさっています。心理的、精神的な儀式は、参加者が今言葉と行動の面で積極的に参加することを要求しています。私はその過程を天地創造にたとえるのが好きです。神様はただ世界を造られたのではありませんでした。神様の言葉の中に世界を造り出す力があつたのでした。

創世記のなかでは、神様がまず言葉でおっしゃらないことは何も起こりませんでした。神様はこの方法を続けられ、天地創造の全ての段階を言葉で述べられました。神様は何が起ころるか、そして何が成就されたかを確認し宣言されました。話す言葉の中には途方もない力が含まれて

## 「生きた聖書」の発想

います。その言葉を通して、私達の精神や感情の働きによって、創造と発達のための出口が見つかるとは、私達が言葉に出して言う時、一種の進化が起るのです。というのは言葉から行動が、発達が、創造が、命が生まれるからなのです。

私達の毎日の生活は、めっちゃくちやかも知れませんが、礼拝集会の最初の段階で、私達の生活の中で何がうまく行っていないか、何で苦しんでいるのかを明らかにします。私達は参加者にそれらを言葉に出して言い、あるがままにそれらを見るように勧めます。「生きた聖書」の儀式の間に、私達は主に混乱状態にある私達に手を差し伸べてくれるように、私達の存在そのものの奥深くにある暗黒の部分にいる私達に触れてくれるようにお願いをします。私達の心の混乱のことを話すために言葉を用いることで、新しい自己を創造することは、天地創造と似たものとなるでしょう。感情と歴史の海が合わさって嘆きが起き、乾燥した大地が出現することになるでしょう。この新しい大地から、草や種のできる植物が育ち、それらが最終的に実を結ぶでしょう。この営みは豊かで命を育み、心の不毛の荒地を豊かな大地に変えるでしょう。本質的に私達は生まれ変わるのです。

生きた聖書の主たる目的は、精神的、感情的に癒されることを求めている女性に、生きている神様がいるという事実を知らせることなのです。この神様は、女性達との個人的な関係を求めています。神様は、女性達が今その存在を感じない、または感じ取れないという事実があるにも関わらず、この関係を積極的に求められています。気配りの行き届いた援助や優しい指導や変わることにない支援を通して、女性達を大切に思っている神様によってどんなに自分が愛され、許されているかを女性達に教えることができるよう私達は望んでいます。

生きた神様の存在を実感させるために用いられる方法は新しいものではありません。それは、キリストと親しい関係にあった聖人の手紙や伝記の中に記述されてきました。その方法は本当に非常に簡単なものです。聖書の物語を声に出して読むことなのです。グループの女性達は、自分をその物語の中に置いて、その物語の一部になり、物語の中の人物と一体化するように求められます。

この一例は、晩餐の食卓で横になっているキリストの足を洗った女性です。この物語の中

の亭主は、キリストが彼の家に入ってきた時キリストの足を洗うことを怠りました。このことは、私達の中には神様の存在を当たり前のものでして考えられるものがあるのになぜかということを示しています。私達は、神様は特別な気遣いが必要としないし、当然の敬意を神様に表わさなくても安らぎを感じられると思っています。

神様の存在を感じられなくなった女性は、キリストの存在を当然のこととは決して感じることができないでしょう。事実、この女性が神様の存在を認識し、自分の罪深さに気づくようになれば、自分にとってキリストが意味するもの全てを示すために全く出費を惜しまないでしょう。

彼女はキリストに対する愛を表現するために持てる全てのものを捧げるでしょう。キリストがこの惜しみない愛情の表現を受け入れて下さることに気づいて下さい。キリストは彼女の行為を咎めることはなさいません。キリストは彼女が最悪の罪を犯したことを知りつつ、彼女を受け入れて下さるのです。キリストは彼女の悲しみの涙とともに、最も高価な香油でキリストを清めることを許されるでしょう。

なぜならキリストはこのようにすることで彼女の心が癒されることを知っておられるからなのです。

です。

あなたはキリストの近くに価値がありませんよ、と言う人々のいる前でキリストに近寄りうとする時でさえ、私達にその価値があるかないかを決めるのはキリスト自身なのです。キリストは私達が悪すぎる、または罪深すぎるからといって顔を背けることはなさいません。キリストは全てをわかっておられます。他の者がどのように私達のことを思っているか、私達が自分のことをどのように思っているか、私達を歓迎して下さい。

このような聖書の話の中では、静かにしていて、その話のなかで何が起っているかに集中することが大切なのです。女性達は、沈黙して、目を閉じ、体の力を抜くために深呼吸するように求められます。聖霊が聖書の話を通して働きかけようとしていることを彼女達に教えることが大切なのです。女性達は、静かにして、聖書に集中し、本当に存在しているキリストが自分達を助けて下さると信じるように励まされるのです。

苦しい記憶をたどった後、安らぎを増すために考えだされた「生きた聖書」の儀式が数多くあります。その儀式によってキリストと一对一の関係を体験することができ、困難な時や、思

い出す過程で表面化してくる苦しい気持ちを感じている時、参加者は自分達が力強く癒されてくられる慈愛あふれる神様の腕の中であやされているという安らぎの気持ちの源としてこれらのイメージに帰っていくことができます。

十字架の上で、私達がキリストに近づくことを恐れなかった。キリストが私達を拒むことは決してありません。キリストは私達が経験することは全て経験され、最も罪深く最も遠くにいると思われている人々の一番近くにいます。なぜなら、そのような人々は十字架の上で孤独で見捨てられた時のキリストに最も似ているからなのです。

私達の信仰の礎が、苦しみは永続的で自己を復活させてくれる価値があることを私達に教えてくれます。これは十字架の勝利なのです。私達が謙虚に、失敗や破綻を主の私達を復活させてくれる愛に委ねる時、主がその失敗や破綻を変えてくれることを私達は信じています。これが復活の力なのです。信じる者になら誰にでもキリストが与えてくれるのは、永遠の命と再生の約束なのです。

(テレサ・カリススキ・ピョークとバーバラ・グレン・ラファエロの葡萄畑(アルパハウズ)1985年という書物より抜粋)

# 娘の悲しみと家族の苦悩

過去十年間、私は妊娠中絶による精神的ショックを受けている人々のカウンセリングを行ってきた。父親が助けを求めて連絡してくるというケースは今までに二件だけあった。一番最近の例がデービス氏という男性だった。(本人を特定できないように本名を変えた。)彼は自分の娘を助けて欲しいと言ってきた。「娘にはカウンセリングが必要なのです。誰か客観的に見られる人が。私ではだめなことは神がご存じです。」何かを後悔しているかのように、彼の声は次第に弱々しくなっていく。

「一体どうしたのですか？」と私が聞くと、「あの」と彼は口ごもった。「娘のジーナがある男とつき合っているのです。そいつは娘に対して言葉だけでなく肉体的にも暴力をふるっているのです。娘の人生をめちゃめちゃにしているのです。」デービス氏の声は絶望しているようなふうに聞こえた。彼の声からは怒りや苦悩を読みとることができたが、それにも増してどうしようもできないという無力感が感じとれた。「娘の人生が台無しにされていくのをただじっと見ているわけにはいかないのです。その男にはすでに別の女性との間に子ども

こそそ告げ口しているとは思われないのです。」

「娘さんは妊娠中絶をなさいたか。」と私は当然のように尋ねた。中絶、という明確な言葉を使って尋ねたのです。沈黙が流れた。だが聞いてはいけない質問だとは思わなかった。なぜなら私は妊娠中絶後のカウンセリングセンターを経営しているというのに、相談してくる人々の多くはその本当の理由を言いたがらないのをわかっているからだ。

その晩、私は彼の娘に会った。ジーナは19歳で長いブロンドの髪に悲しい青い目をしていて、「父がそうしろと言ったんです。」と彼女は説明した。「中絶しなければこれから先一緒に暮らすことはできないと言ったのです。父はそう言えば、私が父を嫌いになるのをわかっていながらそう言ったのです。すぐに忘れられるから、と父は言いました。私は中絶を肯定するような教育はされてきませんでした。高校ではそのことをレポートにしたくらいです。」彼女の目は涙でいっぱいになり、まぶしいサファ

アの様に輝いていた。ジーナは自分が中絶したことがこの三年間誰にも話したことがなかった。ところがこの数分の間にその記憶が悲しみの波のように押し寄せてきた。よみがえる彼女の記憶は私の治療をするという態度に体当たりしてきた。それからしばらくの間、私は彼女の高ぶる感情を押さえなければならなかった。

ジーナはむせび泣きながら、そして、時々深呼吸をしながら話を始めた。「ある金曜日、大学から帰宅して、妊娠したことやこれから先どうしていくかを両親に話しました。父親は激怒しました。どうしてこんな目に合わされなければいけないのかと私たちにくっかかりました。父は私のボーイフレンドを台所に連れていき、男同士で話をしようとしてました。私を中に入れてくれようとはしませんでした。父は彼に中絶が最善策であることを私に説得するよう迫っていました。」

辛そうながらも彼女は話を続けた。「その二日後には私は台の上で横たわり、両足をあぶみに乗せられていました。私はずっと叫んでいました。母に連れられていったのです。こんなのいやだと何度も言いました。お願いやめて！こんなことさせないで！と何度も繰り返してました。でも誰も聞いてくれなかった。カウンセラーが本当にいいのかと尋ねた時、私は肩をすくめました。しゃべることができなかつたのです。」

とうとう実施されました。みんなが私の赤ちゃんを殺したのです。「苦しみをこらえきれなくなつてジーナはうめき始めた。身体を曲げ、子宮に手を当てながら、彼女は自分が中絶したことを信じることができなかつた。長い間黙って涙を流した後、ジーナは再び続けた。「中絶があつたという間の出来事だつたように、みんなすぐにそ

のことを忘れていきました。両親は決してそのことについて話すことはありませんでした。私が未だにジョーと会っていることを知って二人は憤りました。そして、彼を批判する言葉を弱めることはありませんでした。ジョーと私の間も決してうまくいっているとは言えませんでした。いつもけんかをしていました。私はふさぎ込んでいて、自分の感情をどうコントロールすればいいのかまったくわかりませんでした。恥ずかしくて中絶のことを友達には話せませんでした。両親も誰にも言わないと約束してくれました。」

話を聞くうちに、彼女が複雑な嘆きのサインをたくさん発していることに気がついた。ジーナは私たちの支援グループに加わり、その上個別治療にも通うようになった。

ジーナは自分とおなかの中の赤ちゃんを守ってくれなかつたことに対してジョーに怒りを感じていた。中絶を言い張つたのは彼女の両親だつたにもかかわらず、彼は常にジーナを非難した。さらに自分の妊娠を受け入れてくれなかつた両親に





も憤りを感じていた。彼らはただ単に面倒な問題から逃れたかっただけなのである。二つの忠誠心に挟まれて、ジーナはこの一件に関して自分の気持ちを発展させることができなくなったのであった。

ジーナの家族は名目上はキリスト教信者であるが、その信仰は信仰箇条に基づいて、妊娠を中断させるという決定を下す際の役目は果たせなかったようである。彼女の両親は中絶をさせることが彼女を貧困や真の愛情を抱いていない男から守る手段だと信じていたのである。ジョーにはすでに面倒をみていない子どもがいる。そのような男と娘が将来一緒になることを両親は恐れたのである。

そして今、その将来がやってきた。ジーナはいまだに暴力的なボーイフレンドに執着している。彼女の自尊心は打ちのめされ、うつ状態が頻繁にやってくる。両親は悲観的な変化が娘を変えてしまったと嘆いている。

ジーナは自分の人生において常に不可欠な存在の両親に認めても

らい、愛情を注いでもらいたいのである。彼女は成長して子どもを産み母親になることを許してもらえなかったのだ。妊娠中絶をした時に、女性らしさも同時に失ったのである。発育に関して彼女は行き詰まってしまったのだ。独立及び成人と両親への感情的依存から逃れることに失敗して、身動きがとれなくなった上に、自信を失い、ジーナは自分で決断したり、考えを主張したり、人を愛することができなくなってしまうたのである。彼女の心は怒りと深い傷で満ちていた。悲しみもあつた。幸せと希望を与えてくれるはずの子どもの死に対してである。赤ちゃんに関するあらゆるものが彼女を苦しめた。おむつのコマーシャル、そして子どもの姿さえもそうだった。あらゆるものが容赦なく心に襲いかかった。彼女の魂には簡単には出血を止められない傷が残っているのである。

ある時、中絶後のショックから立ち直らせるための治療中にジーナはこのような気持ちを口にすることができた。彼女の両親がこの治療に参加して、彼女の喪失感を認め、自分の娘の墜落に自分たちにも責任があることを認めることはとても重要なことだった。両親が娘の体験について自分たちを正当化し、実際にとつた行動をかばうことはわかっていた。このように感情的、精神的苦痛に直面したり認めたりすることを拒むことを拒絶と呼ぶ。治療の現段階におい

て、拒絶は強力な誘惑である。

ジーナの母親がまずやってきた。娘の話を聞いて悲しんだ。私は母親の悲痛な表情に、おきまりの「でも」という言葉がしつこく繰り返されていくのを感じていた。あなたに傷つけているのはわかっている、「でも」それが一番いいと思つたのよ。今が辛いのはわかる、「でも」自分の人生を生きていかなければならないの。赤ちゃんを産みかかった、「でも」どうやって生活していくというの? 「でも」学校はどうするの、「でも」「でも」「でも」・・・これがいつまでも続き、汚れた洗濯物のように決して終わることがないのである。一つ一つの例外がジーナから自分が失つたものを理解する能力を奪っていった。こみ上げていた感情は埋もれ、落胆、心配、自責へと変わつていく。ジーナには悲しむことに対する許しが必要だった。彼女にはこの出来事に対する真の同情と支持を両親から与えてもらえなかつたのである。彼らは妊娠を受け入れることができなかった。そして今は彼女の悲しみを受けとめることができないのである。彼女は完全に両親から拒否されていると感じているのである。

### 父親が一番の理解者?

ジーナは中絶をしてから自分がどんな風にすごしてきたかを父親はまったく理解してないと語つた。父親を喜ばせるためにどれほ

ど苦勞してきたかをわかっていないというのである。これは本人からきちんと話さなければいけないことだと思ひ、デービス氏にもセッションに参加してもらつたことにした。その前夜彼は私に電話をよこした。

「明日のことを聞いて以来ずっと胃がひっくり返りそうないい話をしています。」と彼は話した。「私はジーナのために一番よいと思うことをしたいのです。」それから彼の口調がさらに丁寧にして力強くなつた。「この問題が私にとって道徳的問題ではないということを知つていただきたい。ジーナはあの中絶するしかなかったのです! 今でもあの判断は正しかったと思つています。万が一同じ状況が起きたら、間違いなく同じ選択をするでしょう。娘がこんなことを聞きたくないことはわかつてます。娘の気持ちを楽にするためには、私は嘘をついた方がいいのでしょうか? そうするべきなのでしょうか? でもあれは間違いだつたなんて、絶対に言えませぬ!」

決意を新たに、私は話し始めた。「デービスさん、あなたが娘さんのことを心から愛しているのはよくわかつています。そして彼女もあなたを愛している。そうでなければあなたの言うとおりに中絶などしなかつたでしょう。今何が事実なのかというと、あなたの娘さんが何かを失つてしまった、ということなのです。失つたのは子どもです。彼女の赤ちゃん、あな

たの孫です。ジーナは来る日も来る日もそのことを考えて、毎晩涙を流しているのです。彼女にとつてあの日の出来事は終わつていないのです。中絶が彼女にどんな影響をもたらしたのかをあなたには聞いてあげる必要があります。」

デービス氏は返事をしなかつた。確信をもって私は続けた。「人が死んだ時に他人が口にする言葉の中で最悪なのは「それが一番いいことだった。これでよかったんだ。」と云うことです。こんなことを言つても何の慰めにもなりません。失つたことや悲しいことを理解していないということに怒らせるだけの事です。ジーナにとつて気の毒なのは、あなたが彼女が失つた命の事で悲しんでいることに気づいていないことなのです。ジーナは自分の赤ちゃんがいなくて寂しがつているのです。その赤ちゃんの存在をあなたは理解していないのです。」

ついにはデービス氏は話を聞くことを約束し、何か自分も学べるようなことがあるかもしれないと言つた。それ以上のことがどうして望めようか。ほんの少しだが、扉が開けたような気がした。「男は感情的に涙もろくはなれないものです。」と彼は私に言つた。彼は赤ちゃんがかわいそうだと素直に感じたいと思つたが、できなかった。それでも、自分の娘の力になれるのなら、きちんと話を聞こうと決心したのであった。

# 話を聞くことと責任をとること

翌朝、デービス氏は驚くべき発言でセツションを始めた。「私にはあのような選択をする権利はなかった。」昨夜の電話でのやりとりを一晚中あれこれ考えたのだろう。彼は初めて中絶がジーナ自身の選択ではなかったことを認めただのである。

真剣なセツションが始まった。ジーナは自分の怒り、苦痛そして拒絶感をあらわにした。中絶した子どもへの悲しみも忘れなかった。両親は初めて自分たちの選択をかばったり正当化したりすることなく話を聞いた。ジーナは、親の言うとおりに中絶を行い個人的に責任を負うことになった。彼女は両親にも同じことをしてほしいと求めた。

治療を受けることによって、両親がいかにジーナに親と赤ちゃんのどちらかの選択をせまったかが理解されるようになってきた。今度は親とジョーのどちらかを選ばせるようなことはしないで欲しいと私は頼んだ。苦しさと悲しみで、ジーナは再び中絶と同じ選択を受け入れることになるかもしれない。それは、両親の娘であることにさえ、終わりを告げるようになるかもしれないのである。

ジーナは重い精神的苦痛を味わってきており、拒絶感を抱いて

いた。彼女は、両親が有無を言わず憎んでいるジョーを受け入れてもらおうと無意識のうちに反撃していた。この態度が父親に中絶を迫らせたのであった。ジーナは暴力的な行動をされるのをわかっていながらジョーにしがみついていた。彼女が自尊心を失い、無力になつていったのは、父親が彼女のことを誤つた扱いをしたからだといふのは間違いなかった。ジョーの存在もジーナと中絶した子どもをしっかり結びつけていた。

ジョーをあきらめることは赤ちゃんをあきらめることだった。彼女の悲しみは深すぎてそれはとてもできることではなかった。この悪循環にはまり、ジーナは自分と父親を責めるしかなかったのである。デービス氏は初めていくつかのことを真つ正面から見ることができるようになっていった。ついに赤ちゃんがいたことを認識し、ジョーから切り放して考えることができるようになった。中絶は、娘の性行為の面影を消し去り、彼女が行つたことの結末から思い切つて解放してあげるはずだと思つていた。彼は自分の娘が今はもう一人の女性に成長し、自分がコントロールできる存在でないことに気づき始めたのだ。娘が親に見捨てられる恐怖にかられることなく自分の決断をくだせることを彼は信じる必要があつた。

これらの解釈がはつきりと見えてくると、デービス氏は今まで断固として表明していた拒絶をこれ

以上持続することができなくなつた。突然、デービス氏の心に悲しみが襲つた。彼は信じられないという目をしていった。まるで真つ暗な部屋に突然明るい光の矢が差し込んできたかのようだった。

彼は悲痛な声を出した。「ああ、私のかわいい娘よ。ああ、愛しいジーナ！」彼は叫んだ。「許しておくれ。私は完全に間違つていた。」娘の頬に顔を押しつけると、彼の目にはとつとつ涙があふれてきた。一緒に泣いていたジーナの涙が彼の涙と交わつた。ジーナは父親に抱きついた。父親が娘の長い髪をなでながら、二人は強く抱き合つていた。怒りや苦痛、鬱積した感情そして悲しみがすべて消え失せた。二人は互いの腕の中ですすり泣いた。彼は娘の許しを請うた。涙とちり紙にまみれて、父親はジーナがすばらしい母親になっていただろうにと言つた。彼女の母親としての立場が立証されたこのかけがえない瞬間にジーナはほつとして涙を流したのであつた。

それから数週間以内にジーナは中絶後遺症治療のための施設に出かけた。それは追悼会とキリストの復活祭のクライマックスにさしかかる時期と重なつた。ジーナは両親とジョーを招待した。追悼会の時、両親はそれぞれ勇敢にも席を立ち、中絶された子どもに宛てて書いた手紙を読み始めた。ジーナが失つた我が子に対して愛情をよみがえらせている一方で、両親は無数の涙、悲しみそして罪悪感

に浸つていたのである。全ての拒絶は断ち切られた。デービス氏にとつて、中絶がついに道徳的問題として認識されたのである。彼が自分の犯した罪に苦しんでいるのは、追悼会の中の彼の表情から読みとれた。一家の苦悩と罪はまだ終わつてはいない。しかし私たちがの人生における信仰と希望という恵みは、キリストが十字架にかけられたカルパリの丘までの苦しい道のりの後には必ず復活があることを悟らせてくれる。

このような治療を続けていくためには、家族の一人一人が神の許しを請い、他人をも許せることが大切になってくる。デービス氏の場合はジーナを妊娠させたボーイフレンドを許さなければ、彼が求めているえん罪は実現しないことになる。人を許すには努力がいるし、折りや恵みが必要である。人を許すのは一つの選択である。「おまえは私を深く傷つけた。だが今抱いている苦しみや憎悪にこれ以上私の人生をだめにさせるつもりはない。おまえを嫌いだからといって、孫を失つたように娘を失うようなことはせつたいにしない。」と言わせる選択である。

妊娠中絶はそれに関わつた全ての人を不幸にするような大きな過ちである。家族関係を破壊してしまふような結末が待っている。だが神の癒しや許しや回復を可能にする能力を上回る悪は存在しないのも事実である。

テレサ・K・パーク博士

いつもニュース・レターをありがとございます。いのちの尊さについて、毎号、気付けられること、反省させられること、改めて考え直すこと等、多々あつて、素晴らしい運動に出会えたことをよるこび、感謝しております。赤ちゃんを60部注文いたします。前回注文して、手にした時、あまりの美しさに驚きました。また、このパンフレットを拝読してから、全ての胎児赤ちゃんという(あたりまえのことですけれど)、意識と愛情の気持ちが強く持つことが出来るようになったのを自分でも感じています。時に無自覚で、時に「何か、ちがう?」と感じながらも、いのちについて、現在の医学、文明の「主流とされるあたりまえ」に感化されて、生きてきたことの多い者の一人です。プロ・ライフに出会えて、本当によかつたと知らずにいた頃を思うと、切に思います。これからもお身体を大切に頑張ってください。尊いいのちのために活動される皆様にリアアさまの御保護があります

高崎市 K・Rさん

# 日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

## 会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円  
一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

## 事務所時間:

月一金 12:00 - 17:00  
日のみ 14:00 - 18:00  
土曜日 休み

## 御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店  
口座番号: 0573553  
日本プロ・ライフ・ムーブメント  
郵便局: 「郵便振替」  
現在口座番号: 01660-5-39607  
日本プロ・ライフ・ムーブメント

### 事務所便り

われは海の子 白波の  
さわぐいそへの 松原に  
煙たなびく とまやこそ  
わがなつかしき 住み家なれ  
生まれて潮に ゆあみして  
波を子もりの 歌と聞き  
千里よせくる 海の気を  
吸いてわらべと なりにけり

皆様、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。お伺い申し上げます。

子ども達には楽しい夏休みのある七月には、日本の『生命尊重の日』もあります。それは、七月十三日で、優生保護法が施行された日を記念してその日と決められました。私達は皆様のご支援に支えて頂いたお陰で、今日まで、『プロ・ライフ・ニュース』を全国に送り続けることが出来ました。本当に感謝いたします。この中絶反対の運動に熱心になればなるほど、えてして、中絶してしまつた女性、その人への心配りに欠けることがあることに気が付き、悲しくて立ち止まつてしまつてことがあります。彼女達の苦しみ、憤り、弱さをもとに受け止め、同じ弱さを持つ友達だから、中絶後のいやしのカウンセリングもプロ・ライフのもう一つの仕事として関わっていかねば良いのだけれど...と、常々考えておりました。この度、実行していきたいと思っております。このもう一つの仕事のためにも、どうか皆様のお祈りをお願い致します。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 絶望と許し

中絶を行ったことがある多くの女性は、神の許しを口にすることができても、心に受け入れることは難しい戒めです。どうして彼女たちが許されると言えるのでしょうか。彼女たちの罪の意識は非常に大きなものなのです。多くの人は神の許しを信じなければいけないと分かっており、信仰の印として信じているのです。しかし、自然界のあらゆる物事が彼女たちは許されていない、許されるべきではないとさえも言っている時、どうして彼女たちは許されたと感じることができるのでしょうか。

私はもちろん、この複雑な問題に完全な答えを持ち合わせていませんが、「神は中絶を含め、あらゆる罪を許して下さる」という単純な真実を提供できると信じています。これは啓示された真実ですが、それと同時に、この真実の裏にあるいくつかの道理を見ることで、より大きな感謝に発展させることができるのです。私たちはこの道理を見ることによって、中絶を経験したことのある男性と女性とで分かち合わなければならぬ真実だけでなく、何故、私たちが彼らを非難することなく、助けるべきかを説明するための理由も発見することができると私は信じ

ます。

私が車を運転し、スリルのために猛スピードで走っていると仮定して下さい。私は閃光を見ます。衝突。そして誰かをひき殺したことが分かります。私は被害者の元へ走ります。彼は死んでいました。罪のない男性が私の過失で殺されてしまったのです。私の罪は実に現実のもので、罰せられるべきものです。しかし、数秒後、被害者は生きて無傷な状態で起き上がります。その瞬間、私の罪は消えました。私は助かったのです。私の徳行によってではなく、彼の不死によつてです。

これと全く同じ方法で、私たちは皆殺人を許されてきたのです。私たちの罪によつて、それがどのような種類のものであっても、私たち一人一人はキリストを十字架に張り付けたので有罪なのです。私たちの罪のために、キリストは十字架上で殺されたのです。キリストの血は私たちの手に掛かっているのです。しかし復活の日曜日、キリストは生き返りました。キリストは死んでなどいなかったのです。私たちの罪は解かれたのです。

デビッド・レッドマン